

身近なまちの風景物語(25)

背後の履歴

巨木や老木、そして桜樹が並び、水辺で縁取られた公園。歴史あるその場所は城址である。

まちの中で自然の息吹が感じられ、瞳に映る水と緑は眼に優しい。ざわつくまちの喧噪をよそに、まちの空気を清浄してくれる。

城址に残る遺構は歴史的な資源として保存される。史跡に指定されれば、より一層、文化財としての価値を維持するために管理される。そうした前提で城址をみると、目の当たりにする遺構らしきものはすべて藩政期から残されていると錯覚することもある。

建造物や工作物は、残っているものもあれば、再建されたものもある。土浦城址である亀城公園では櫓門^{やぐら}が藩政期から残る建造物であり、西櫓は昭和24年の台風被害で解体された後、保管されていた部材で平成4年に再建され、東櫓は平成10年に復元された。

こうした経緯は案内板などで説明されている。また老朽化に伴う修理や震災復旧などが施されていることも想定内である。

ところが土木的遺構はわかりにくい。石垣、土塁、濠（水のある堀）は目の前にある姿がおよそ藩政期の姿と思われやすい。建造物とは異なり、復元や再造がされるイメージがわきにくい。

この亀城公園では櫓門から旧本丸に入る手前にある通路の両側に濠がある。正確に言えば水面がある。濠のように見えるこの水面は近代に再造された。

維新後、旧二の丸は耕作地として利用され、濠は埋め立てられて整地された。その後、昭和10年に城址が本格的に公園として整備される時、濠のあった箇所に水面が再造されたのである。

最近では城址の再整備に伴い金沢城址や宇都宮城址などで濠の一部が復元されている。土浦ではかなり早い段階で、城址に濠の水面を復活させた。全国的にも極めて稀な例である。

目に入る城址は、維新から百五十年の履歴を経た姿である。こうした背景や経緯を知ると、積み重ねられた歴史の重みを感じる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程1年）